

2012年 司教年頭書簡 信仰パート2

教区時報 2012年2月号 巻頭言

～信仰の恵みを生きよう～

今年の年頭書簡は、昨年の年頭書簡で取り上げた 11 の信仰のセンスを、ロザリオの祈りと黙想を通して解説するのだと言われます。

ところで「信仰のセンス」とは、信ずべき内容を聖霊の働きによって悟る霊的な直感のようなものを指すのでしょうか。

ロザリオの四つの神秘の 20 の黙想は、ロザリオの祈りを唱えることによって、キリストと聖母の生涯に触れ、イエスの教え（むずかしく言えば啓示）に触れ私達の信仰を深めることにその目的があります（かつて三つの神秘の 15 の黙想だったものに、光の神秘を加えたのは、イエス・キリストの全てを理解させようとしたのです）

1. 信仰の体験・キリストとの出会いを告げましょう

(信仰の人格的センス)

さて、今月の黙想は年頭書簡の第1「信仰の体験・キリストとの出会いを告げましょう(信仰の人格的センス)」です。このセンスを育むために、司教は喜びの神秘の(1)「お告げ」と栄えの神秘の(2)「ご昇天」について語られます。

ところで、この「人格的センス」とは何を言おうとしているのかをラッシュ・オーモンド著『神学ダイジェスト 92号』による説明を引用します。

『信仰のセンスは第一に、人格的特質を有する。それは聖霊の力の中に、キリストを通して出会う、神との人格的關係の実りである。このセンスは、自己を与える神の動きにおいて働きかける、神との内的なつながりである。信仰とは神との人格的な愛の交わりである。この信仰のセンスは人格的な愛情關係に由来する。』

この愛の交わりが、お告げの時のマリア様の「み旨のままに」という言葉によって表されます。

また、ご昇天により、私達は世に派遣されるわけですが、それは「主が世の終りまで共に居てくださる(エンマヌエル)」ことを、喜びの中に証ししていくのだという意味になるのだと思います。

(村上 透磨)

2. 祈り・みことば・新しい情熱

(信仰の発見的センス)

「マリア、イエスを生む」(御託身)

イエスが何者であるかは、現場(馬舟)では分かりませんでした。

それは預言の助けを借りることと遠く離れた牧場で、羊飼いに天からのお告げ(説明)によって、はじめて理解されたのです。それは「これらのことを天の御父が、幼子のような者に示したこと」(ルカ 10・21-22)を意味します。神の「みことば」の「コト」「心」「意味」を発見すると言うのです。

もう一つは「マリア、イエスを神殿で見いだす」です。

マリアはイエスを神殿で発見された時にイエスが言われたことが、分からなかったが、その言葉と出来事の奥に隠された「コト」(神の心、思い、計画)に思いをはせていられた。つまり祈りの中に聖霊の降臨の時まで観想しつづけられた。

こうしてマリアの中に信仰は成長して行かれたのです。もともと全ての業も言葉も神ご自身も、人間の理解をこえた見えないものです。それを知るためには、ただ聞く(見る)だけでは駄目、じっと注意して聞く(見る)だけでも不十分、「信仰の目」「心の目」「霊の目」をもって聞く(見る)時に、神様の神秘が啓示されるというのです。その神秘が少し示されるには、神と出会いたいとの忍耐強い、熱意が求められるのです。その喜びは？(マタイ 13・44-45)

(村上 透磨)

3. 出来事の中で、主への信頼を深める

(信仰のセンスにおける認識的〔知る〕側面)

神とその啓示(おしえ)の内容を、理解する「信仰」は、信仰者と神との交わりによって生まれる愛が生み出す、いわば神と人とが本性を一つにするような交わりから生まれる認識とも言えるものだというのです。

その信仰の内容の理解は、何か言葉を越えた象徴とか比喩によってしか表現出来ないような神秘の性質を帯びたものです。

ちなみに、聖書によれば「知る」という語は、たんなる知的理解ではなく、信頼と愛に基づく知恵、人格的交わりを表すのです。

「信仰」は、このような愛の交わりに招いておられる方に心を開いて「聴くこと」「見ること」から始まる日常の出来事との出会いの中で、神を「知る」靈的感觉(直観)といった側面があるというのです。

さて、年頭書簡では信仰の認識的センスを説明してから、カナの婚礼におけるマリアとイエスとの出会いをあげています。

マリアは、婚礼という日常の出来事の中で、花婿と花嫁が当面する問題を「知って」おられた、しかしマリアは、御子のこともよく「知って」おられ、その思い、計画、御業を「知って」おられた。また、御子は御父のみ旨を「知って」おられ、その実現である死と復活への御子の歩みを「知る」マリアは、ご自分も神と御子のみ旨を御子に委ねようとされた。だからマリアは「この人の言う通りになさい」と私たち信仰者にも言われるのです。

こうして私たちは「神を知る」ものとされて行きます。

(村上 透磨)

4. キリストによって、
キリストとともに
キリストのうちに

(信仰のキリスト論的センス)

ロザリオはの祈りは聖母マリアへの祈りと観想と思われていますが「その核心は、キリストを中心とした祈り」です。キリスト中心の祈りは、三位一体の神を究極的な対象とすることになると年頭書簡は語ります。

さて、光の神秘の第3の黙想は「イエス、神の国の到来を告げ、人々の回心に招く」ことであり、この祈りを通して「イエスの招きに応え、心から悔い改めて福音を証しする者になろう」と呼びかけます。「福音を信じるとは、イエス・キリストを受け入れることです。心から悔い改めるとは考え方を改め、頭を切り換え、心を入れ替え、生きる方向を転換することです。心と体全体でキリストの福音を受け入れることが、あかしの第一歩だ」と。

もう一つは、イエスの復活「栄えの神秘 第1の黙想」を通して「主と共に死んで、その復活にも与ろう」です。この呼びかけに応える事も「信仰のキリスト論的センス」を培うことだと年頭書簡は語ります。

この生き方を貫いたのは、パウロです。「パウロは、復活の恵みに与るため、古い自己を捨て、新しい自己に生きることを目指しました。キリストに倣うとは、新しい自己をキリストに見立て、生活の中で具体的に実践することによって、キリストの模範に生きること」だと言われます。年頭書簡には「フィリピ3・10-11」を引用していますが、それは自ずと私達をキリストと同じ思いを抱きなさいと語る「キリスト賛歌」の黙想へと私達を招きます。

(村上 透磨)

5. 受ける秘跡より、生きる秘跡へ

(信仰の秘跡的センス)

私達はよく「秘跡を受ける」と言うが、秘跡はそんな消極的のものではなくて、私達の信仰の源泉であり、原動力である。また秘跡は私達の信仰を養い育て、生き生きとしたキリスト者を作りあげるものであり、他方、信仰は秘跡を豊かにするものでもある。

さて、年頭書簡は、ここでヨルダン川のイエスの洗礼(光の神秘①)、私達の罪のため鞭打たれるキリストの受難(苦しみ of 神秘②)を黙想するように招く。つまり、七つの神秘中特に「洗礼」と「ゆるし」の秘跡を通して、養われる信仰のセンスを磨くことにより、私達の信仰を深めようという勧めなのであろうか。

ところで、この「洗礼」と「ゆるし」の秘跡を通して私達は、何を学ばせていただくのだろうか。主の洗礼の黙想では「キリストの思い」を知るようにとうながしている。また「主の鞭打ち」を黙想することによって「へりくだりの心を持って、主の憐れみに」気付きましょうと説かれているように思える。

尚この「神秘的センス」の意味を理解する鍵は、秘跡を、人となられたキリストを通して示された「神と人との出会いとしての秘跡」という考え方にあると思われる。秘跡は「神と人との出会い」なのだという理解である。

出会いの秘跡としてのキリストに、最も近い方はマリアであり、このマリアを通して祈るのである。

(村上 透磨)

信仰と生活の一致・奉仕と愛の実践

(信仰の実践的センス)

信仰のセンスに「知る」と言う側面がある。この「知る」とは「愛する」とことと、ほとんど同義であると考え、知識は行動へと駆り立て「愛する」と言う行動へと招くことになる。実に、何かを信じるという直感的信仰のセンスは、誰かを愛するという直感的センスとなる。日常生活にあって、信仰が意味するものを知ることは「愛こそが私達に愛することを義務づけるのだ」と理解することにある。この信仰理解は、おのずと信仰実践、愛の実践へと駆り立てる。以上が「信仰の実践的センス」の意義である。

そこで年頭書簡は、信仰の実践的センスを生み出すためにまず「私達も日々自分の十字架を担って、主に従って行こう」と呼びかけ、十字架の神秘の黙想へ招く(苦しみの神秘 第4の黙想)。

次に「全てを捧げ尽くされた、イエスの愛の日々にならば、すべてを捧げよう」と呼びかけ、聖体の制定(光の神秘 第5の黙想)へと招く。

ここに示されるイエスの姿は、愛ゆえに無に至るまで従う者となられた謙遜の極み(フィリピ 2・5—12)として現れ「苦しみを担い私達のあがないのため死んでいかれるキリストの十字架は、愛のための犠牲のシンボルであり、聖体は「神と人に対するイエスの徹底的な愛と奉獻のしるし」でもあると言われます。

信仰の実践的センスは、キリストの心を心とし(フィリピ 2・5)。キリストが愛されたように、自分の命を捧げて生きること(ヨハネ 15・13)、また、キリストに倣いキリストのあとを追って生きる(マタイ 16・24—28)ことであると思われ。このように、十字架と聖体の愛の神秘に触れることにより、キリスト者の中に生き生きとした信仰の実践を生み出すことを望むのです。

(村上 透磨)

7. 救いの恵み・喜び・平和

(信仰の救済的センス)

この意味は「救いの恵み・喜び・平和」を日常生活の中で、体験していく人に、信仰の救済的センスがあるということなのでしょう。

神との深い交わりにより、愛されている事を知った(認識的センス)キリスト者は「愛する」という行いを通して(実践的センス)愛することが使命だと理解するようになる。愛に促された信仰感覚によって生きるとき、人は自分の人生において、救いが実現していると体験されるようになる。こうして人々は自らの生活に救いの恵みが働き、それにより喜びと平和を感じ取るようになる。このような感覚が信仰の救済的センスとよばれている。

さて、信仰のセンスは、主の死と復活にあやかることによって与えられる。年頭書簡は、信仰の救済的センスを次のように説明する。「救いに関する知識は、苦しみや不安からの解放という救いの経験によって意味を与えられ再生の力になる」と。

イエスの十字架上の死(苦しみの神秘⑤)はすべてを捧げ尽くす奉獻の極みである。それは救いの恵みが全ての人に与えられることを人々に示すことで、特に悲しむ人、貧しい人の中に先に行って生きておられるキリストに出会うという形を取る。

救いは、苦しみの共感に留まらない、さらに永遠の命の希望と喜びに入る恵みを願う者に実現される。それが、マリアの被昇天(栄えの神秘④)の黙想へと私たちを招く。

マリアの被昇天は、私たちの救いのために十字架上の死を遂げ、復活された主が、与えられる永遠の命の保証とその恵みの先取りである。主の再臨の時、私たち、主を信じ、主の道を歩む者にも与えられる。

(村上透磨)

8. 希望・人生のリズム

(信仰の統合的センス)

年頭書簡8は「あなたの信仰は人生の物語となっていますか？」との問いかけで始まります。これは昨年の年頭書簡9で語られたことです。統合的センスは次のように説明されます。「信仰のセンスは、統合的感覚である。これは即ち、信仰の発見的・認識的・キリスト論的・秘跡的・実践的・救済的センス」に働いており『この統合が、過去と現在、信仰と個人のアイデンティティー、教義と生活、信仰と実践をつなぐ。罪と救いの人生の糸は、一つの物語である。意味ある全体に織り込まれている』。その物語において、神はあがない、また自らを顕すのですと。

さて、年頭書簡では「ロザリオの祈りの単純なリズムは人生のリズムを刻む」という言葉を導入の言葉として、信仰の統合的センスをロザリオの二つの神秘をもって説明されます。一つは、マリアの奉献(喜びの神秘 第4)。その呼びかけは、毎日の生活を神に奉献しよう。もう一つは、いばらの冠(苦しみ of 神秘 第3)で、その呼びかけは「誤解や侮辱を恐れずに、信仰に生きよう」である。

マリアの奉献には「心を剣で刺し貫かれる」との預言が含まれている。これは、私達の信仰生活には必ず、犠牲と困難が伴うのだが、その中で愛をもって、マリアのように「アーメン」

(そうでありますように)と語り続ける真の信仰を見出します。

いばらの冠をかぶせられた時、あらゆる侮辱と苦難を耐えしのびます。そこにはゲッセマネの園の時、血の汗を流しながら「私の願いではなく、み心のままに行ってください」(ルカ 22・42)と語り続ける真の信仰が認められます。

ゲッセマネの園におけるキリストは、最大の苦悩と絶望との戦いであったと、ある聖女は言っています。そして、この個所は神不在の現代社会では、見えない神に希望を置く福音的価値観が無視されても、私達はこれを選択していく信仰が要求されます。現代は確かに信仰によって生き続けることは非常に困難な時代です。だからこそ「希望」をもって信仰による「人生の物語を造り上げていかなければならない。そのためキリスト者は、日々の生活の中でいつも愛を持って「アーメン」と語り続ける信仰。また、み旨が行われますようにと祈りつつ生き続ける信仰が求められていることとなります。

(村上透磨)

9. 預言者のまなざし

(信仰の批判的センス)

キリスト者は、信仰による救済的知識のおかげで、明敏な判断能力が身に付き、神の愛に反するものを識別する直観的な感覚が養われていきます。これが、信仰のセンスの批判的次元で、預言者のまなざしに似ています。

2012年司教年頭書簡より

10. 福音の芽生えを育む連帯・奉仕

(信仰の共同体的センス)

私たちは自分の信仰のセンスを確認するために、他のキリスト者の信仰のセンスの尺度に目を向けます。信仰の批判的センスは拡大され、教会共同体的センスとなります。

2012年司教年頭書簡より

1 1. 新しい福音宣教のための勇気

(信仰の聖霊論的センス)

聖霊に満たされて、いつも勇気をもって救いの福音をのべ伝える者になろう
栄の神秘(第3の黙想)「聖霊が降りる」

これが今年の司教書簡の締めくくりとなり、また、信仰年開始への呼びかけとなっています。

2月号で紹介した、ラッシュ・オーモンドの言葉を引用すると次のような言葉があります。「教会の正式な教えの内容と、実際に信者が信じる内容との間にはずれがあるにもかかわらず、聖霊は神がさしのべる啓示的救済に、その存在の底から応答する人々に対して信仰のセンスを与えてくださるのである」と。ヨハネの 16・13 には「真理の霊が……真理のあらゆる面を悟らせるだろう」とある。聖霊降臨の朝、使徒達は聖霊に満たされ聖霊が語らせるままに……語り始め(使徒 2・4)と記し、聖霊の働きが教会とその信仰を形造って行く事を証言しています(使徒言行録の主題)。

ヨハネ・パウロ II 世は、その使徒的書簡のおとめマリアのロザリオにおいて「マリアと共にキリストを観想する」のであり、ロザリオは「福音の要約」だとも言われています。

さて、ロザリオの信心が盛んになったのは、十三世紀の聖ドミニコとドミニコ会士達でした。彼らは、福音の教えを十分に理解していないため正当な信仰から離れて行く多くの人々に、真の福音を理解させ、異端から救おうとしたのが、ロザリオの信心でした。ロザリオは、祈りと生活を結びつけるものであると共に、一つの最も優れたカテケージス(要理教育)でもあったのです。

ロザリオについては、父の思い出があります。とても理屈っぽかった父も、晩年はいつもロザリオを唱えておりました。歩く時も、バスの中でも、御ミサの中でも(?)……。ある日父が私にこう申しました「わしはこの頃、耳が遠くなって、説教もよう聞こえん、目も悪くなって小さな字は読めん。それで、ロザリオを唱えているんやが、悪いかのう」と。この父は歩けなくなるまで日曜日のミサを欠かしたことはありませんでした。ロザリオのすばらしさは、臨終の時やもう祈れなくなっても祈れるということを体験します。

ロザリオの祈りを唱えて信仰を表明する人に主はきっと喜んで言われます「あなたはこれらのことを賢い人に隠して、小さい人々に現してくれた、ありがとう」と。

(村上 透磨)